

ロンドンの思い出 (92・10・12)

柴田善助 (昭12・文甲)

長い会社生活の中で、一九七二(昭和四十七)年の冬から一九七六(昭和五十一)年の夏まで(株)東食のロンドン支店に勤務しましたが、この約四年半が私にとって最も充実した会社生活が出来た時代であったと、思っています。二十年前から十六年前のロンドンであります。

最近(去る八月末)「ロンドンの思い出」と題して一〇〇頁ばかりの小冊子を、当時つけていた簡単な日記を頼りにまとめ、自分で出版しました。そしてこれを子供や孫に配り、知人友人にも謹呈したのですが、意外にも割合に評判がよく、嬉しく思っている次第でございます。

三高十二会の諸兄にも勿論呈上いたしました。板倉幹事から面白く読んだから、十二日会の月例会では是非話をしろとの厳命を受けました。大方の諸兄は既に私の冊子を読んでもらって居ますので、改めてどんなことを話せばよいのか、随分迷った次第ですが、思い切ってお引受けいたしました。

それで今日お話しすることは、先の私の小冊子の続編となる訳ですが一部ダブルこともあるかと思ひますのでご了承の程お願い申し上げます。

私は京都一中、三高、京大と十年間、ラグビーをやった人間です。ラグビーの元祖は申す迄もなく英国でありますので、本場で本物のラグビーを観られるという楽しみがあつて、ロンドンへ喜んで赴任した次第であります。さてロンドンに住んでみますと、ラグビーは期待通りエンジョイすることが出来ました。が、そればかりか日常の生活が大変快適で、英国人の余裕ある生活態度に感心させられました。日本人はまだ／＼学ぶべき点が多いと思つた次第であります。

私に取りまして忘れられない思い出が色々ある訳でございますが、やはりラグビーのことから始めさせて頂きます。私は赴任に際し日本のラグビー協会からロンドンのアタッシェになつてくれとの要請を受け、これを引受けて行つた関係から、英国のラグビー協会から色々便宜を与えられ、ロンドン郊外のトウイツケンナムという、イングランドのラグビーの本拠地で行われるビッグゲームを毎度観戦することが出来ました。毎年一月から三月にかけて五カ国対抗の試合が行われますが、イングランド、スコットランド、ウェールズ、アイルランドとフランスの五カ国がリーグ戦をやります。イングランドとスコットランドとウェールズは同じ女王を戴きながら別々の国として試合をします。私の在留した頃はウェールズが最強でしたが、ここ二年程はイングラン

ドが強く全勝を記録しています。フランスの応援団は揃いのベレー帽をかぶり楽隊を連れて乗り込んできます。トウイツケンナムのスタジアムは七万五千人収容できますが、このようなテストマッチ（正式に国を代表するチームの対抗戦）の時はスタジアムは熱気に溢れます。

英国でビッグスポーツといえば、まずラグビー、それにボート、クリケット等がありますが、その選手が一般の人から尊敬されるスポーツをビッグスポーツと言うようです。サッカーのプロリーグは大衆に大変な人気がありますが、紳士のやるスポーツとは言われません。英国ではアマチュアスポーツが本流であります。

一九七三（昭和四十八）年の九月、全日本代表チームが、ウエールズに招待されて、初めて英国に遠征して来ました。

我々三高蹴球部（ラグビー部）は日本で慶応に次いで二番目に古い歴史をもっていますが、蹴球部には昔から「早く行きたい英国の本場所へ、観衆十万、その中で」という数え歌がありまして、コンパでよく唱ったものです。今度の英国への遠征は日本のラガーマンにとって長年の夢が実現したというものです。ウエールズとの試合は十月六日その主都カーディフで、テストマッチとして行われましたが、実力の差は大きく62―14で敗れました。ロンドンからも大勢の在留邦人が応援に出かけましたが、ウエールズは当時五カ国対抗の最強のチームでしたから、敗れても悔

はありません。むしろ二トライできたのは天晴れというべきでしょう。

ロンドンへ帰って来た日本代表チームは、十月十三日、イングランドの二十三才以下の選抜軍とトウィツケンナムで対戦しましたが、これにも19―10で敗れました。二十三才以下のチームはナショナルチームより実力が落ちますがイングランドは日本を侮った訳ではなく、ウエールズが招待した日本チームと正式のテストマッチをすることは、ウエールズに遠慮したのだと思います。

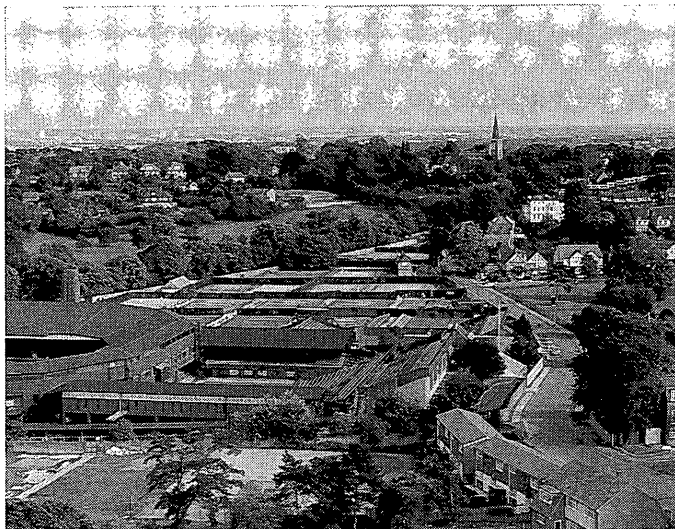
その代りこの試合のあと英国のラグビー協会は約一八〇人を招待する盛大なディナーパーティをハイドパークに近いケンジントンクロスホテルで催し、私も招待されました。日本選手団はブレザーコートですが、その他の参会者は皆ディナージャケット（タキシード）にブラツタイという正式のパーティでありました。私の席はナンバーワンのテーブルに指定されていました。このテーブルは、テストマッチに何回も出場して、いわゆるキャップを沢山持っている昔の名選手ばかりのテーブルでありました。それに驚いたことに私の隣りの席はウエークフィールドさんで敬称ロードケンダルと呼びますが、「ラガー」という我々が学生時代ラグビーの教科書のように親しんだ本の著者でありました。七十四才と言っておられました。かくしゃくたる老紳士でした。私が「『ラガー』は日本のラグビーのバイブルでした」とお世辞を言うと、向いの席からすかさず「それで日本が負けた訳がわかった」と茶々が入り、大笑いとなりました。和気あいあいの愉快なテーブルでした。最後に日本選手は「すきやきソング」を合唱し拍手喝采を受け

パーティーは終わりました。イングランドの素晴らしいラグビーソサイテイの雰囲気を楽しむことが出来ました。

ラグビーの思い出はきりがありませんが、この辺でやめ、あと印象深かったことを申し上げます。

私より三ヶ月おかれて家内がロンドンに参りました。五月から六月にかけては百花繚乱、桜並木も方々に見受けられる一番美しい季節であります。家内は来て間もなく一人でバスに乗って買物に出かけました。ご承知のようにバスは二階建てで、二階には座席の数だけしか乗せませんが、一階は定員以上に四人まで乗せてくれます。立っている人が四人居る訳です。車掌が居る車内で切符を売るほか、こういう事をチェックしていますので、ぎゅう／＼の満員バスというものはありません。家内が一階の席に坐つて外を眺めていると、バスが揺れて、立っていた小学生の女の子が家内の肩にもたれかかったそうです。ただそれ丈のことにその女の子は家内に、「済みません」と丁寧に謝つたのだそうです。家内は帰宅してこの様子を私に話し、子供のしつけのよさに感動して居りました。

英国では小学生や中学生は公共の乗り物では絶対に坐りません。そして坐っている大人や婦人も乗り物の中では決して居眠りをしません。日本人は疲れているのでしょうか、電車の中でよく



我が家から見たウインブルドンのテニスコート

居眠りをして隣りの人の肩によりかかり
迷惑をかけて居るのを見掛けます。

私は最初の二カ月程はロンドンの北の郊外のスイスコツテイジという所に住みました。その後、西南の郊外になるウインブルドンに引越しました。スイスコツテイジより新しく開けた住宅地でありまして、環境は大変よく、私の十一階のフラット（日本でいうマンション）からの眺めは素晴らしく、あのウインブルドンのテニスコートも眼下に見え、小さな湖の周囲に作られているゴルフコースや湖に浮かぶヨットが望見できます。引越しますと先ず所轄の警察署に届けなければなりません、数日後には警察から電話

がかかって来て、「ホームドクターはもう決めましたか。まだならお宅の近くにはこういう医者
が居るから相談しなさい」と教えてくれます。住宅地では医者だからといって大きな看板をあげ
ている訳ではありませんので、教えてもらわないと見付けることがなか／＼難かしいのです。こ
のように役所が積極的に住民にサービスしてくれます。役人は文字通り公僕であります。

ウインブルドンに住んだお陰で、全英オープンテニスを観ることが出来、またテムズ河にも
近いのでオックスフォードとケンブリッジのボートレースを何度も観ることが出来ました。

私のフラットと廊下を隔てた向側のフラットにミッドランド銀行の重役夫妻が住んで居ました。
或る日家内が日本からの来客のために、焼き魚をしました。その臭いがこの人のフラットに流
れて行ったらしく、「魚を焼く時はキッチンの窓を一杯に空けて焼いて下さい」と書いた手紙が
郵便受に入っていました。昼間の出来事です。会社から帰って、私はこの手紙を見て、早速電話
をしました。奥さんは出ず、主人が電話口に出ましたので、「しかじかの手紙を奥さんからもら
ったが、今後注意をしますから」と謝りました。主人は「そんなことは聞いてません。気にしな
いで下さい。」とあっさり逃げられました。英国には魚を焼く料理はないようで、その臭いが嫌
いなのです。この失敗談は忘れられません。

それからずっと後のことでありますが、そろ／＼帰国すべき時期が近づいた或る日の早朝、私

達の住んでいるマンションに火事がおこりました。

一つのフロアーに四軒のフラットがありまして、真中にエレベーターがある構造になっていますが、一階下の十階のフラットが火元でありました。煙が吹き出しているのを家内がまず見付けました。私はとび起きてガウンを羽織り、まつ先に向いのフラットに「火事だ」と伝えました。焼き魚で迷惑をかけた恩返しです。

日本へ持つて帰る土産物など大分買い込んだのに、むぎむぎ焼けてしまうのかと思ひながら、バスポートなど大切なものをポストンバッグに詰め込んで急ぎ階下に降りました。間もなく消防車が沢山来て、ハシゴを延ばして火元の住人、夫婦と子供一人を救出しようとしています。同じマンションの住人は皆外に出て、これを見守っているのに、例のミッドランド銀行氏が見当たらないので、おかしいなと思つていきますと、暫らくして彼はきちんと背広を着てネクタイまで締め、悠然と出て来ました。全くおかしなジエントルマンです。幸い火事は延焼することなく、火元のフラットを焼いただけで鎮火し、私の土産物も助かり、ほっと致しました。火元のフラットの住人三人も無事救出されましたが、煙草の火の不仕末が原因であつたようです。

家から車で十分ほどの所にリッチモンド・パークという広大な公園がありました。地図で測つてみますと二〇〇万坪以上の広さであります。鹿や羊が沢山放し飼いにされていて、公園内には

ロイヤルバレースクールやつつじの群生しているイサベラプランテーションという美しい日本式庭園もあります。この公園は歩いて通り抜けることは、とても出来ません。私が客を案内する時は車でウインブルドンに近いロビンフッドゲートという門から入り、西へどん／＼走って、テームズ河を見おろせるリッチモンドゲートへ抜けることにしていました。公園内の道路は舗装されていいますが、道路以外は殆んどが芝生で、大きな樹木も沢山あります。そしてワラビがあちこちに群生しています。ワラビは我々には食用として摘みとりたいものですが、ここでは鹿のエサになるものから取って帰る訳にはゆきません。

このリッチモンドパークに隣接してウインブルドンコモンがあります。コモンはパークほど人工を施さないで自然の原野の趣を残している共有地であります。これも広いもので一〇〇万坪はあるでしょう。ここには鹿が居なくて、リスばかり目につきますが、このワラビは持ち帰って喰べても差支えないことになっています。このコモンの中にゴルフコースが二つありまして、一ポンド払えば一日中遊ばせてくれます。

日本の本州と英国とは同じ位の島国ですが、日本は山地が七割以上あるのに対し英国は山地が少なく、平地やなだらかな丘陵地が七割以上占めています。それに人口が日本の半分ですからゆったりしたもので、大きな公園を沢山作ることが出来たのでしよう

英国には未だに階級意識がありますが、誰もが立身出世をしようとは思っていないようです。現に爵位があつて、伯爵とか男爵とかは、昔からの大きな館を守っているのですが、経済的には国の援助は何もないので、館の一部を公開して観覧料を取つて維持している例も少なくありません。しかし政治家や軍人になつて実社会で活躍している人も多いと聞きます。大体五百家族ぐらいが爵位を持つていて、彼等が貴族階級であります。普通の庶民がこの階級に入つて行くことは望むべくもありません。

貴族の子供が生れると男の子なら直ぐイートンとかハーローとかいうパブリックスクールに入學を予約するのだそうです。パブリックスクールとは、名前はパブリックですが、貴族や上流の子弟しか入學出来ません。

ご承知と思いますが、イートン校の制服は生徒も先生も燕尾服で、全寮制度です。イートンはウインザー城の近くにありまして、ウインザー城からテムズ河の向うに校舎や校庭を見下ろすことが出来ます。校庭にはラグビーのポストが沢山見え、盛んにラグビーをやるようです。ラグビーという競技は、ラグビー校というパブリックスクールが発祥の地であることはご存じかと思えます。

或る日、客を案内してイートン校を見学しましたが、客が写真を撮りたいといふので教室から寮へ帰る燕尾服を着た二人の生徒に並んで立つてもらいシャッターを切りました。「あとで写真

を送るから名前を覚えてくれ」と言いましたら、「ノーサンキューとあっさり断られました。なんでも写真をとりたがる癖はよくないと反省させられました。イートン校の卒業生はイートニアンといわれ、そのしゃべる英語も普通とは一寸違うのだそうです。あとオックスフォードやケンブリッジへ進むのですが、中には軍学校へ入る者も居ます。あの有名なウインストン・チャーチルはハーロースクールから陸軍士官学校に入りました。勿論庶民の子供にもこれ等の大学へ入る道は開かれています。よく出来る子供のために、グラマースクールという進学校がありまして、ここでよい成績をとると大学へ進めます。当時大学は五十位しかないと聞いていましたが、近時は技術教育振興のため、この種のカレッジが沢山できています。

前首相のサッチャー女史は、グラマースクールからオックスフォードを卒業した人で、パブリックスクールを経ていませんので、彼女の英語は今一つ感心しないと悪口を言われます。「英国では履歴書は要らない。しゃべり方で教育程度がわかる」と言いますが、本当かどうか、我々には分かりかねます。

一般庶民、たとえばタクシーの運転手にしても、「ロンドンの生活はいかがですか」と如何にも英国はよい国でしょうと言わんばかりの調子で話しかけてくる事があります。彼等は外国のことはよく知らないのに、英国人としての誇りだけは持っているようです。そして自分の職業に自信と誇りを持っているように思われます。

それに私が強く感じたことは、上の人が下の人を使うのが上手なことです。たとえば、余り適切な例ではないかも知れませんが、我々が簡単に昼食をとるようなごく普通のレストランでも皿が運ばれてくると「サンキュ」と小声で言つて、食事にかかります。少々待たされても文句を言うことはありません。小さいことですが、こういう気配りや行儀が、血で血を洗う階級闘争なしで今日まで来ているのではないのでしょうか。

要するに申し上げたいことは、日本が経済的に一流国になったことは誠に結構なことですが、もう少し余裕のある住みよい社会、外国人にも住みよい社会をつくらねば世界に通用しないということがあります。衣食足つて礼節を知り、気の利いた冗談の一つも言える国民になりたいものです。

私の話は、私事ばかりで恐縮ですが、何か少しでもご参考になることがありましたら幸甚に存じます。

(株式会社東食取締役ロンドン支店長)